# 瓔珞品

泉鏡花作

## 一

「私は夜さり、此の道歩行くのでも、恐うてならんやしな。」

と小店の表、軒下の土間へ、新筵折敷いた上を、白い素足で蹈みながら、恁う、其の聲の優しい事。棲を横に一寸取つて、肉附のふつくりした脛を合はせて、上へ、下へ、輕く蹈むに、囁くばかりの、水の流の音もしないが、腰に絡へる雪の布、なほ晒すかと見えるのは、饂飩の粉を捏るのである。是なる饂飩屋、飯もあり、諸子の附燒、小鮎の煮浸、芋、牛蒡、蓮、人參、燒どうふの煮染も召せ。これは年紀のころ三十路ばかり、眉のあと青く、髪黒く、歯を染めた、いゝ女房。内端に働く傍に、長くなつて、伸々と泥草鞋、筵に近う差伸ばし、胴體を框に渡して、上り端六畳ばかりなる處に据ゑた、角火鉢の前に、肱を曲げ、〓を支へ、俯向いて饂飩を蹈む件の女房の顔を、下から見上げるやうに、仰様に寝轉ん

で、蛇が見惚れた風に、ぐツたりした、背のひよろ／＼と長い、髪の房りした、頤の尖つた、目つきのわるさかしげな、旅商人體の生若い男が、すぐに言じりについて、だらけた調子で、

「へ、へ、をなごの恐いのと、猫の冷いのは、嘘やといふわいな。」

「いやらしい、あんな。」と打棄るやうにいつて、女房がフト目瞼をほんのりと染めた時、奥からつか／＼と出て來た、一人、手足に當てゝ稍太い、胸に合はせて些と廣い、膝のあたりの聊か古びた、黒の背廣の服を着た、頭の地の透いて見ゆるまで、分苅一の短いので、鐵ぶちの近眼鏡をゆるく嵌めた、中脊の人物。眉にも、目にも、口許にも、威儀はづツしり備つて、學は眉宇の間に深く、徳は全幅に溢れたが、我を輕いものあつかひに、然も無雑作な歩行振。

二足三足、表座敷を、火鉢に躓くかと粗忽かしく、茶の中折の帽をひよいと冠つた。

さあ、此の人のつむりの上には、帽子があつて、天井があつて、屋根があつて、而して五月晴の天がある。此處へ娘が送つて出て來た。

十八九の、目のぱつちりした、色の透通る、髪の濡れた、それを素直な銀杏返、黒く艶やかなのが、にほひ溢れて、一重つゝんだかと思ふ顔の色、肖て其の母よりも花やかならず。

「おかさん、おたち。」

「はあ。」

とうけて、女房の顔を上げた時、客は早や旅商人と、押並んで框に腰。

ずぼんをあげて、靴を仰向けにして、引くと、爪尖を下ろすが如くにして穿いた。

土間に立つて、穿き占めて、二つばかり踵で蹈むと、女房の其の足取と、ゆるやかに調子が合つた、長閑な日和。

右の方で、

「よう、おいでやす。」

「お世話、」

といひながら、左の方に生々と橋を渡した、件のひよろ長い旅商人の胴のあたりに、ふと目がついて、唯見直したが、如何にしけむ。

渠は其の濃な、柔和な眉を顰めたのである。同時に其の手は、何物かもとむる状して、齊して左右の

衣兜へ入つた。

どちらにもゝのこそありけれ。一方は分らぬが、左に端のあらはれたのは、安繪具で、蒼く、紅く、べつとりとなすくつた、石版畫の、部の厚い表紙のついた、ものゝ本。　旅商人は、此方には目もかけず、丁ど其の顔に間近く來た、娘の縞の前垂を、熟、とろりとした目つきなり。

女房が心着いて、

「あんたはん、お忘れもの、もしな、お荷物は。」

## 二

「あゝ、いや無い。荷物は残らず停車場前の茶店へ預けて來た。」

渠は又、自分の様子に氣がついたか、然あらぬ状に笑を含んで、三間々口を明け放して、驛路に面する敷居を跨ぐと、差出でた廂の下。

柳の蔭はないけれども、日に疎くて暗い軒を、すらりと燕が流れて通る。

これに瞳を遮られて、立淀んで左右を見たのを、娘は土地に馴れない人の、方角に迷つたと推量したらう。左へ行けば停車場。右は此の一條の故道を、次第に何處までも山になつて、湖を見ながら隣國へ通ずるのである。

裳に飜然と白い蝶、赤きはな緒に素足を留めて、背後から送つて出て、

「あのな、天人石へ行きやはりますなら、南だつせえな。」

と指さしする。燕が又一羽、其方から地を低う、すら／＼と、波に海松房の寄る風情。柳も前途にちらほらあり。

「然うかい、分つた。」

といつて、づツと道へ。・・・・・

旅商人は頭を擡げて、厭な目をして見送つたが、此方は娘にも振返らず、袖ふり合ふて、ふ縁も離れて、たゞ道中の孤客となンぬ。

道づれは燕が、背後から肩を越し、前から袖に行違ひ、ひらりと白く、ちらりと黒い。

さても此の驛に年少き男女あらば、心を此の鳥の翼に委ねて、思を空に通はすであらう。あら、せはしなの戀、のどかなるながめやな。

旅客は凡そ一町ばかり、ふら／／と通つた。

鳥の囀る聲あり。燕の兒の親を呼ぶ、と見ると、今辭した饂飩屋には向ひ側、左手の軒に板を合はせて、往來へ何憚からず衝とさし出したは其の巣である。

又六の門ならなくに、杉の葉を束ねたやうな、影一ツ日向に落ちて、上には三つ四つ、頰を合はせて愛くるしい。

旅客は是に足を留めたが、もの懐かしげに店を覗くと、雛も人形もあるのではない、草鞋がかゝつて、笊が見え、新しい釣瓶繩、古びた箱など竝んで居る。

一足退つて見ると、澁色の帆木綿に染め抜いて、萬あら物類、御煙草として軒暖簾。

「一寸・・・・」

煙草を一個買ひに入つた。

「御免よ、」

「はい、」

といふと、商賣は内よりせず、横合から、四十ばかりの痩せた男、どんつくを裾長う、小倉の帯をきちんと締めた、背に六ツばかりの男の兒をおんぶしたのが、ひよつくりと顔を見せて、

「はあ、何でございます。」　言はゆるいが、唐突なあらはれ方。これでは今足を留めた時、肩を竝べてゞも居たのであらう、旅客は俯向いて歩行いて、氣がつかなかつた。

旅客は、負はれながらうしろへ反つて、伸上つて巣を覗く背なる童子と、此の重量にもたれて、前屈みになつて突出した、保名の顔を右瞻左瞻たが、

「煙草を下さい、巻いたのは。」

「お生憎や、ございませんでなあ、其處にのせてございます、それぱかりでございます。」

「此の、團にした是かい。」

といつた、箱の上に三つばかり、袋にもせねば結へもせず、朱を入れた棒のある、手習清書を切つた上に、ふはりと輕い忘れ草、暖簾にちら／＼とある影は、此の精靈が風なき日和を、絲遊になつて遊ぶらしい。

子持の商人は客の肩越に店を覗いて、

「はあ、それだつせ。」

背を遮つていはれたので、煙管を持たぬ、旅の風、刻は要らぬ人らしいが、出勝手が惡かつたか、

「それでは、此を一ツ貰つて行かう。」　「あんたはん、お取りやして。」

ぐるりと胸を曲げて仰向いて、抜衣紋で、小兒に、

「ばあ、」

## 三

「坊やは幾歳になる。」　手づから煙草の反故包を、左の衣兜に突込みながら、立向うて旅客は聞いた。兒と親と這個三つの顔は、巣の中の燕の如く、日向に竝んだのである。

「五ツや、もし。」

「あゝ、然うか。」

「あんたはん、小兒衆がござりますかいな。」

「いや、ともだちに一人あるんぢや。むゝ、佳い兒だな、名は？」

「げんきちにござります」

聞くと齊しく、額のあたり、片手蔽うたやうに、颯と曇つた、旅客の面。冷い風を避くるが如く、横様に打背くと、

「あゝ、然うか。」

とばかり斜めに向う側へ身を開いて、其まゝ前途へ。

薪屋、古着屋、小間物屋、金物屋など店を竝ぶる、此の側は、前の饂飩屋と軒續きで、鍋は、釜は、鯛、達磨、小袖も、頭巾も、前垂も、路とゝもに物ふり

て、煙草と類は齊しけれども、兎も角も廂は揃つて、屋根なりに日影が長く、店前に老若　男女、ものはいはぬが、聲はせぬが、通りかゝる旅客を眺めて、首が傾き、〓が伸び、目が動きなどもした。

來た順で覺えて居る。此の背後は田を一ツ、川を一ツ、遙かに其處が停車場まで、青田を見通す透のなきだけに、宿屋も殘つて、出女の、毛筋はすらりと通つたが、あはれ片鬢は、ほろ／＼と、黒髪の抜けた趣。あら物屋のある側は、空屋やら、仕舞屋やら、燒たと思はるゝ痕もあり、刎釣瓶の井戸も見え、壁の落ちた厠も見え、蜘蛛の圍も見え、蜂も啼く。

三軒飛び、五軒飛び、辛うじて路を縫ふ、其の破屋の間々は、羽目の穴からも、戸障子襖の破からも、直ちに草の萌黄の峰、松山の松が覗かるゝ。

其の裏山の松の根は、戸毎の背戸に蔓り、峰の草は屋根に繁つて、此の片側は、恁くてあるうちにも、次第に地に埋るゝかと危く、叉數世紀の以前、世に葬られ果てたのが、草鞋とゝもに燃え出でゝ、失せし驛路の俤を、幻に日影に描いたかと疑はれて、おつゞら馬が、旅駕籠が、こゝにひらめく燕のやう、

宙を歩行いてゆきゝせぬのが却て怪いばかりであつた。

さて、其の窓を蔽ひ、棟を壓した、山は、驛の半ばと思ふあたり、頂高く、次第に脈を南に垂れて、衝と走つて、行方なき雲に入る方の、路もやゝ爪尖上り。坂と明かに認めらるゝやうになると、角に一座の伽藍あり、古寺に突當つて、其處から兩岐に左右に岐れる……

弘化三丙午年再建之

左仲仙道

とだけ讀まれた。石碑は苔を被て、草を敷寝、ごろりと寺の門に北枕。

及腰に、禮拝するが如く打視めて、

「あゝ、此處だ。」　と呟いたが、眞直に立つて、見直して、

「蘆澤辰起、爰に來たつて亡ぶ……と書いてもないか。」と唯一人立つて、物さみしげに苦笑した。靴をのせた路の邊の草は、濃き雲の裝して、左は山へ、右は野へ。

やゝあつて低徊して、踵を山の方にめぐらした、此の寺と向ひ合つて、壁も柱も塗の兀げた、薄暗い

大構(おほがまへ)の古家(ふるいへ)が一軒(けん)。

土間(どま)を廣々(ひろ〳〵)と取(と)つた、地(つち)の濕(しめり)に、山(やま)の色(いろ)が蒼(あを)く射(さ)して、夏(なつ)の近(ちか)い氣勢(けはひ)が見(み)え、清酒(せいしゅ)の樽(たる)が積(つ)んである。

## 四

「杯はよし、要らん。」

と、衣兜に手を入れて、

「今朝旅籠屋で呉れたのが、こゝにある。それは可し。何か、些とばかり肴が欲しいと思ふがね。」

「はい、はい、お魚は恁うやつて、皆な活かして置きますけに、鮮しいのがござります。」

若い男の實體なのが、色の褪せた紺の筒袖、布の廣い前垂して、ゆつくりと踞んで、手を翳して見せた。水は樋の口からむく／＼と溢れ出て、石疊へ灌いで、水脚を輪にして流るゝ、五尺まはりの生洲の中へ、皿小鉢の影もさし、吊つた棚の影もさし、人影もさして、鰭ひら／＼と、鮒あり、鯉あり、仕出し料理もするらしい。

「それにや及ばん、一寸皮包みにでもして袂へ入れて行かれるやうな、何か出來あひのものはないだらうか。」

「はい、」

といひ、生洲の前に踞んだなり、のろりと客を打

仰き、
「可いものがございます。表にも看板を出してございますが、鮒の鮨がありますで、これは、はい、當所の名物で、又私どもが名代でございますが。」
辰起は打頷き、
「ぢや、それを些と下さらんか。・」
「どれだけさ差上げます。」
「何、ほんの少々で可い、然うさ五錢も貰はうか。」
酒屋は兩の頬を擴げた、以つての外の顔色で、
「や、もし、そないなもんぢやございませぬ。それに、はい、切賣は出来ませんでな、強いお氣の毒でございます。」
「切賣をせん、な。」
「はい、」
「一體どんなものかね。」
「これにございます。」
悠々と腰を切つて、兩手で抱くやうに縁を壓へた、鮓桶であらう、しツくいで塗つたやう、中から白い汁の溢れる中に、づツしりと沈んだ、手ごろの壓石。

よい、と取つて、どかりと置き、桶を向うへ傾けると、上澄がさつと流れて、生洲へ落ちて、鮒も鯉も、醉ひさうな酒の香。

「粕漬か。」

「さよぢや、鮒の鮓でござります。これは、はい、三年漬け込んで置きました、ようなれて居りますで、藥になるでこざります。

土用の暑氣拂にな、あんたはん、白湯に入れて用ゐますで、骨も、鱗も、とろ／＼に溶けるでこざりますよ。」

ぐいとつかみ出して、指で扱いて横銜へ、ぺろりと中指を嘗めて舌鼓。

「味は極上でござります。あんたはん、旅のお方やで、ぐツと廉うして置きますで、二貫下はりませ。」

「あゝ、可し、其を一尾貰ふとしよう。土産にするのぢやない、山へ行つて、直ぐに一つ、酒の對手に下卑ようといふのぢやから、切つて貰ひたいな。」

「はあ、可うござりますえ。」といつたが、棚から庖丁を引出した。是が又、途中古道具屋の前の、雨落の莫蓙に錆びついた、柄のなかつたのと大差は

ないので。酒屋はちやぶ／／生洲の水で、束藁をごし／／とかけはじめたから、魚頭から尾に至る、八寸を切つて十六斷。竹の皮包みにするまでは、しばらく時が經つたのである。其の間に、様子を尋ねた辰起が、先刻に饂飩屋の娘に聞いて、是から行かうとする天人石と稱ふる名所は、つい此の屋根の上にあるといつても可い、松山の松の梢に、高き枝に絡んで咲く、藤の花房で繋ぎ留めたやうに、半腹に美しくかゝつて居る。

路は此の坂を半町ほど、それから上つて一まはり、山をあとへ戻るが順。

けれども、家の垣根について、背戸の畠を突切つて、松から松へ足を運べは、直に手が届く、と教へたのである。

## 五

佛のたまはく、劫に二ツのたとへあり、芥子劫といふ。一大城あり、東西千里、南北四千里、此中に芥子を滿つ。百歳に天人天降つて、一芥子を取つて、盡す、一劫なり。

叉、一大石あり、方四十里。百歳に天人來り下り、羅穀衣を取つて、拂ひ盡す。磐石劫、といふとかや。子の日の状も偲ばるゝ、枝、幹、細く、柔かな、葉毎の露や、水の色。湖水の姿梢に宿つて、玲瓏として長に月の夜の景色あり。滿山の隈唯一ツ、一大石の、其の質瑪瑙に似たるありて、中空に、珠の臺の架かれる風情、こゝにこそ降り來らめ、白、紫と咲き交る、藤の花房、低く垂るれば、波のしらべ、松に通ひて、里人の寝覺の耳に、裏の山行く天女の氣勢、霞の衣の音なひは、石に袂の觸るゝぞとて、扨こそ稱へて天人石。

「これだ、」

と獨言した旅の姿は、高く、衝と其の石の上に、松を離れてあらはれた。

前後に松葉累つて、宿の形は影も留めず、深き翠

を一面に、眼界唯限なき漣なり。

此の處に攀づるまで、手で縋り、且つ足を支へた、幹から幹、枝から枝、一足づゝ上るに連れて、何處より寄するともなく、瀲灩たる波、白帆をのせて背に近づき、躑躅を浮べて肩に迫り、倒に藤を宿したが、石の上に、立直つて、今や正に、目の下に望まれた、これなむ日の本の一個所を、琵琶に劃つた水である。

妙なるかな、近江の國。卯月の末の八ツ下り、月白く、山の薄紅、松の梢に藤をかけ、山は翠の黒髪長く、霞は里に裳を曳いて、そよ／＼とある風の調は、湖の琵琶を奏づるのである。

この眺望、久しうして、辰超は磴と横に寝た。

其の目のふちの血の色は、既に二ツ三ツ傾けたので、盞と、酒の瓶と、包を解いた竹の皮は、石を避けて、松の根に。

やがて大理石の机の上に、衣兜から出した件の一册。

ポオル紙の厚表紙に、雪輪を散らして、山形段々の枠を取つた、下にいの字の星兜、三ツ巴の陣太鼓に采を添へて、怪げに彩色したのは、天人石に坐し、

琵琶湖に面して、繰開かるべき詩集でない、經典でない。廣く民間に流布して、牛打つ里の童といへども、一見してそれと頷く、赤穂義士銘々傳、忠臣藏の讀本である。

辰起は頬杖つき、板を扱、ふやうに堅く手に採つて、先づ其の表紙を眺めた。

横にして、茶色に塗つた綴目を眞直に、恁う縦に、返して裏表紙の萌黄色の、手擦れに斑に兀げたのを翳した時、重いものを支へた形の、腕は柔かに一段曲つて、肱枕は低くなンぬ。

と葉越しに日の當る、光線はやゝ薄らいで、湖の波は藍にちら／＼、音もなく眉に揺れて、山の上、石の周圍を包む。

其時うつとりとして半ば眼を閉ぢたが、むつくと頭を、肱を立てゝ、辰起は、本の縁を握つたのを、綴目を石について、指を割つて、掌を開くと、颯と左右へ表紙が分れて、絲の抜けた一ペイジ、こゝに赤穂の城騒動の圖。

天に聳えた城の棟に、瞳を据ゑた目を留めて、思はず投げ出して居た脚を縮めた。大手の櫓に描いてある、當時の凶き兆なりし、大なる蜂の巣が、爪先

に落ち散つた、松球に似て居たから。

石垣高き城の濠、線を遶らした充滿の皺は、こゝに梢の波紋に同じく、下馬先に一騎あり、鞭を擧げた白鉢巻。遠く小さく、東海道を早打の駕籠が雲の空。

辰起は愁然として首垂れた。

## 六

「あ、あ、これは！いや、串戯ではない、あゝ、寐たか。」

「あなた、どうか遊ばしたのでございますか。」

「はあ、」

とばかり茫然として、斜めに起直つた辰起は、夢の覺めた枕許に、磐石劫の天人の天降つたのかと呆氣に取られた。

天人石を取り廻して、美しく幹を揃へ、枝を交へ、葉をかさねた中に、一葉の鬢を犯すことなく、小枝も袂を遮らず、梢の藤は袖に映つて、すらりと安らかに彳んだ、額のかゝり、耳許など、月や山の端にと清らかな、うら若き婦人の姿。

「呀、私、どうかしたですか、」

眼鏡に觸れて音のするまで、幾度も瞬きした。

「あの、おやすみ遊ばしていらつしやいましたのでございますか、」

「寐ましたかな、」とぼーといふ。

「それでは、あのお魘されなさいましたのでございませう。お寝みの處なら、お起し申しますのでは

なかつたのでございます。
何か存じませんけれど、お苦しさうに、聲を出しておいでなさいましたから、あの、それでお起し申しました。
却つて失禮でござんしたこと、御免なすつて下さいまし。」
雲間に月の動くよと、柳の腰をしをらしく、打屈めたが靡くやう。
慌しく禮を返し、
「失禮、……失禮などとは思ひも寄らん、飛んだことを。はや、實に其の、……いや、何とも、其の……むゝ、」
とむぐ／＼、武骨に手の甲で、ぐいと唇をこすつたは、言に差支へたのを悶ゆる狀なり。
「あゝ、驚いたです。失、失禮などゝおつしやつて、途方もない、私、私はお庇で助かりました、何ともどうも、」　又むぐ／＼、きよろ／＼と四邊を〓す。膝許に銘々傳、傍に酒の瓶、鮒の鮓など狼藉たり。
眠りの去らぬ眉を顰め、
「これだ。」

と辰起は羞ぢたる色あり。足をずらして居直つて、更めて、美女を。瞳は漸く清かつたが、眼鏡の下で押拭つた、少し言も判然と、

「貴女は？」

「近所のものですよ。」

「此の、御近所、此の邊の・・・・・」

可怪と見る影瞼に浮んで、朦朧とした氣色。

敏くもそれと見たらしく、

「はい、まるツ切、當地のものではございません。家は遠方でございますが、旅をしまして、此の驛で煩らひました。それであの、停車場寄に宿を取つて、逗留をして居りますのでございます。」

「しかし・・・・・」

「否、山坂をこんな獨歩行をしますんですもの、唯今では、最う身體のわるいのではございませんが、其の病氣で滞の出来ましたのが、思はぬ幸になりまして、豫て尋ねて居りましたお方が、あの、貴下。不思議に當地にいらつしやるのに、ふとお目にかゝりましたものですから、何時までもと存じまして、しばらくになりますのでございます。

最う恁うなりますと、道中すがら、可鹽梅に、病

氣(うき)をしたと思(おも)ひますが、其(そ)の當座(たうざ)は、まあ、どんなに心細(こころぼそ)うござんしたでせう。一寸(ちよいと)お見(み)受(う)け申(まを)しましても、旅(たび)のお方(かた)と見(み)えますのに、もしや、おあんばいが惡(わる)いのではありますまいかと、大抵胸(たいていむね)が痛(いた)うなりました。」　觸(ふ)れなば今(いま)も惱(なや)むべし。簪(かんざし)ならでは、勿刺(なさ)しそ、松(まつ)の葉(は)、俤(おもかげ)に立(た)つ琵琶(びは)の波(なみ)さへ、靜(しずか)に胸(むね)に寄(よ)るにこそ。花(はな)の脣美(くちびるうつく)しく、戰(そよ)ぐが如(ごと)く微笑(ほゝゑ)みて、

「それではお夢(ゆめ)でござんしたか。」

## 七

辰起はやゝ我に返つた。

「夢、然う、夢といへば夢ですが、今見て夢と思ふが其れか、あなたに起して頂いて、恁うしてものをいふのが夢か、殆ど自分にも分別がつかんのですが、」

神か人か、微妙き御前。

「不躾ながら、恁うやつて、貴女と口を利く方を、夢なら覺めるなと思ひます。

しかし、」

しかし、といひつゝ腰をずらして、身を近づけ、

「いふことが、何です、私の申すことが分りますか。先づ、此の顔は人間の顔ですか、別條はありませんか。」

と髯ある頤を下に當てゝ、兩の腕のつけもとを壓へて試たが、面を上げて目を合はせると、きれの長い、瞼をふツくり睫毛を濃く、下伏せに、答を傍へ外づしたのを、追うて縋るやうにした時、辰起は美女が其の片手を、衣ながら透明るばかりの胸に置いた、右をしなやかに垂れた手に、柳の絲かと眞蒼な、

竹で編んだ籠を一個、爪紅に添ふ淺みどりの、葉をはら／＼とかさねつゝ、裳涼しき白脛の、殘んの雪を彩りて、眞紅の露の滴るを見た。鮒の鮓の臭も恥ぢよ、酒の香も消えよかし、苺なりけり、松の中に。

辰起は一目見て、思はず兩の瞳を〓つた。

美女はこれがために、苺を提げた袖ながら、腕ながら、いつしか我を忘るゝ風情に、手首に形なき絲を繫いで、じり／＼と引くばかり、強き力が辰起の目に籠つて、しばらくは傍目も觸らず。

見る／＼、一種いふべからざる痛苦の皺を額に刻んだ、辰起は吻と呼吸をついて、

「あゝ、最う、夢を今、夢を、貴女にお話しいたさうと思つてさへ、咽喉が乾いて、咽喉が乾いて堪らない。

煎りつくやうです。

口を緘ぢつけられさうで、何ともたとへやうがありません。

貴女、其の苺を下さらんか。

無禮千萬。

無法極まる御無心ですが、不可ませんか。

不可い？

知つて居ます、私は知つとる。

貴女は、貴女は、私が、此の神聖なる天人石の、名に對してもあるまじき大失態。竹の皮を引散らかして、熟柿の息を吹いて……呻つて居た、蛇が鳴くやうな聲だつたであらうと思ふ。

それを御覽なすつて、毒蛇が寝て居るとも思はないで、旅のものゝ急病かと呼覺まして下さつた、神とも、佛とも思ふ、慈悲深い、しんせつなお方だ。

優いお方だ。けれども、其の苺に限つては、一個も、缺も下さるわけには行かんでせう。ゆかない理由がある、丁とある、それは有るのです。

知つとる、分つて居ます、な、いけますまい。下さる事はなりますまい。」

いふ息づかひも最忙しく、顔の色も尋常ならず。

美女は従容として、迫れる風采更になく、

「私のものでござんすなら、何よりお易いことなんでございますが、これは、あの、何なのでございます。つい此の山の上に庵を結んでおいでなさいま

す、お爺様がございましてね、其の方から、私のお師匠様に下さいましたのを、頂戴に參りました、私はつかひなんでございますから、」

聞くや、彌が上に色動いて、

「御、御覽なさい、それ、貴女はおつかひ。

山の上の其の御老人は、恐らく蓬莱山から、此の琵琶湖のあたりへ、別荘でも持つたやうな、不死の仙欒を煉るといふ、道士のやうな翁でせう。」

## 八

「又、貴女の、貴女のお師匠さんといふのは、天人、神、神女でおいでなさるであらうと思ふ。いや、思はねばならんのです。

何は措いても、其の貴女のお師匠さんといふ方の、名を聞きたいと思ひます、名です。

然うすれば屹と、今私が、多分然うぢやらうと考へて居る名と、同一であらうと信ずる、確です。」

と激しくいつたが、やがて弛んで言弱く、

「なほ、其の苺は下さるまい。

敢て貴女がたが、惜むといはん。天命だ、天が命ずるのぢや。末期の水よりも一層、一滴の飲を求むるものゝ、身體萎え、心疲れ、氣おとろへ、足窘んで、麓へ下りて、酒屋の土間に湧く清水を飲むことならず、其上山躑躅が、彼方此方に炎を吹き出すやうに燃えるのに、せめても露を含んで居さうな藤の花は、其處においでなさる、貴女でなうては影も映らず。然も此の頬を浸して唇に觸れるまで、湖水の水は樹の間に満ちて、湛々たる淨水あり、天人の視

ること瑠璃の如く、餓鬼の視ること猛火の如しぢや、呼吸をしても飲めさうで、影ばかりで飲めないため、百層倍、渇きを増して、悶え苦む、悪魔に、餓鬼に、苺、苺、震ひつきたい貴女の手の苺の實は、與ふるな、噛ますな、遣るな。

餓鬼を責めろ、と天が命ずるのに違ひない。」

と黒い呼吸を吐いた時、美女は、怪むとより、恐るゝとより、寧ろ、慰めむと思ふやうに、

「まあ、あなた、」

「否、屹と然うです。

試みに誰方か知らんが、貴女の其の、お師匠さんの名を當てゝ見ませうか。

確に疑はん、當る！

又餘り唐突で、狂氣じみたことをいふとお思ひなさるだらうが、此の麓の宿の、貴女、あら物屋の男の兒の名を御存じぢやらうか。

彼はげん吉といひます。」

とて遙にもの思ふ眼鏡の光輝。

「字は知らん、げんは何と書くか分らんが、同一響きです、げん吉と。

最初、饂飩屋の店前で、不思議にひよろ長い男を

見てから、私は妙に氣がさした。で、もう、げん吉とでもいひはせんか、と危みながら、其の兒を負つて居た父親に聞いて見た。

然うでなくて、でなくば、貴女、通りすがりに旅のものが、小兒の名を聞く事がありますか、」

自からたしなめるが如くに言つて、ねばるに苦しむよ、舌を喘ぎ、

「貴女は、何も貴女は御存じない。ないが、しかし、私の腹の中まで、洞察いておいでなさるやうに思ふ、如何ですか、御存じない？

はあ、では、あなたは御承知なくとも、其の庵の御老人、又お師匠さんは御存じだ。

それですから、此の下の寺の門で、向うへ倒れた、石碑の面を見ました時ーー蘆澤辰起ーー私の名です、蘆澤辰起、此處に來たつて亡ぶ、とおのづから文字が浮出いて見えるぢやらうと、戰き且つ恐れたのでした。

けれども唯、中仙道を指したばかりでありましたのは、要するに未だ罪が滅びないで、飛ひつきたい、掻〓つても欲い、其の苺に咽喉を干して、悶えろ、苦しめ、といふ天命だ。

貴女！

貴女のお心には、罪、萬死に當るものだつても、御覧になればあはれでせう。

神龍の御袖に縋つた餓鬼に、世尊の御手に、水の印を結ばせたまうた話もあります。

強ひて苺を下さいとは申＜ＲＰ＞（＜／ＲＰ＞＜ＲＰ＞まを》―さん。願くは、貴女は天の使でいらつしやる。途中天人石をお通りの時、毒蛇あつて、是を狙つた、其の忌むべき、恐るべき、獰猛な、鱗の黒い形を見て、貴女、驚いたとあきらめて、其の、其の籠を此處に落して下さい。

願ひます！」と犇々と擦り寄るを、拒むともなく猶豫ひながら、美女は、じりゝ／＼と附廻さるゝ状になつた。あでなる姿は、避けつゝ、石の上に乗り、辰起の身はぐるりと廻つて、上下に、其すまひのかはつた時、玉の腕も片袖も、しびるゝばかりに、礑と籠を。

苺は散つた、あゝ正に是れ、熟とみつめた毒蛇の目の血汐の涙こぼれし風情。

## 九

「何とも申しやうがありません。體のいゝゆすりでした。畫強盗といつても宜しい、實に、したゝかな事でした。

それにも係はらず、惡魔に見込まれて、驚いてお落しなさつた分の、苺を又、手傳つて拾つて下さつて、お手づから頂いたは、望外の幸福、私は一生の思出です。

嬢さん、私は、あなたのお師匠さんの召食る、苺を横奪した毒蛇ぢや。

けれども、嬢さんに對しては、蚯蚓ほどのことも仕出さんから、御安心をなさい。

大方は間違ひますまい。過日からの私の境遇につけても、一昨夜來の心痛に思ひ合はせても、饂飩屋の店に居た男の、何かに肖て居たのに考へても、確に然うであらうと思ふが、嬢さんのお師匠さんは、何といふお方です、一體男の方ですか、御婦人でせうか。」

問はれて美女の猶豫ふ状は、苺を強請られた時に略同じかつた。

「はい、それを、あの、申上げましても可うございますか、如何でございますか、私にさへ、はじめはお秘しなさいましたほどなのでございますから。

別に恁うと、貴下をお疑ひ申しますのではございません。」

「愈々然うだ、違はない。まあ、兎も角、それだけは聞かせて下さつて宜しからう、嬢さん、御婦人でせうな。」

「……」

「御婦人でせうな。」

強ひて問はれて、美女は困じた状で、身を寄せた、松の幹に手をかけて壓へて輕く指で叩いた。如何にせむすべを木精に問ふや。

背けた顔を、半ば此方へ。

「それは私のお師匠さんでござんすから、御婦人でございますよ。」

謹んで答を待つかの如く、時に、湖の景色に背いて、天人石の一端の低き處に腰かけつゝ、離れて美女の袖の下あたり、頭を垂れて聞き取つたが、思はず深く頷いた。

「果して御婦人、」
辰起は改めて、
「嬢さん、それに就いて、些とお話し申したい事がある、が、お急ぎでありませうか。」
「否、」
「お急ぎでない。しかし日が暮れませうか、此處へ来る途中、松の暗い處がありましたについて、先刻時間を見たですが、時計は留まつて居ました。その上、一寝入したから何時か分らんですが、何だか、一夜明けたやうにも思はれる。目の覺めた折は一生懸命、咽喉が乾いてまるで夢中、唯今は又苺のうまさで生れかはつたやうな心持、殆ど前後不覺です。」
「まだお月様が、白くておいでなさいます。　それに、御覽なさいまし、湖水の波もきら／＼明うございます、日は永うございますよ。」
「重疊々々、嬢さん、御迷惑でありませうが、しばらくお耳を拝借したい。
　それではお草臥れなさるであらう、此處へ、」
　といつて、手早く上衣を脱ぎかけた、幅少し廣き仕立の、直ちに、斜に肩を、辷つた、づぼんの釣は千鳥がけ、小波さらりと襯衣に皺、日あたりながら

薄ら寒さう。
「否、否、貴下、」
「はあ、是を脱いで敷いた處で、鱗があるやうに思召さうか。」
「貴下、飛んだ事をおつしやいます、そんなでお辭儀をしますのではござんせんが、松の若木が柔かで、まあ、しなひます椅子のやうな、此が宜しうございます。」
猶凭りかゝるやうにした、衣のひだ、安らかに、なよやかな裳にも、袖にも幹は逆らはず、柔順に女女を支へたが、最と輕らかな身じろぎにも、梢にゆるゝは、さゞなみ、藤波。
辰起は打仰ぎ、
「あゝ、成程、花は梢にあつて草臥れませんな、われ／＼如き臭骸でない。
では、それに・・・・・」
といひながら上衣は其まゝ脱ぎ棄てた。

## 十

「我意を徹すではありません、嬢さん、昔の人がした通り、此の上に茨を負うて、私はお詫をする氣であります。唯今も、強ひて苺を頂戴した、是は私に取つて、はじめての亂暴ではない。

以前も餘處の庭園から、苺を奪つた事があります。

其時は私自分で、此の身體を惡魔にし、毒蛇になつて、持主の方を怯かしたわけではない、小さな、何です。

私の影法師のやうなものでした。此の松の露が凝つて、松露といふものが出來るのなら、私の魂が形をあらはして鬼となつた、小さな鬼でありました。九ツになる男の兒で、それが名を玄吉といひました。

私は今三十五、それは十年ばかり前の事、斷じて兒を持たんといふ年ではないが、しかし自分の悴でない。

其の時分、私は東京小石川の奥に、自炊をして居た。長屋中、御同様に貧乏人ぢや。兒澤山の中の餓

鬼大将、恐ろしく目の光る、色の眞黒な、まるで黒猫、猫の中でもいかもので、青色蛇でも黒蜥蜴でも、捕つて喰はうといふ豪い小僧。

夕立に傘もさゝなけりや、氷の上も素跣足で、駈け歩行いて、些とも靜とはして居ない、寝て居る内も轉げまはつて、寝惚けて木登りもしかねないといつたやうに、炭團が赫となつた小坊主で。

此奴、總從架の蔭、縁の下、納屋の隅、晝でも暗い處を選つて、礫を持つたり、棒ちぎれ、人でも犬でも狙つては、眼を輝かして居たもんですが。

母親はない、お人よしの父爺ばかり。雀と小兒を可愛がつた、安直妾ぢやが氣立ての優しい、隣長屋の叔母さんにも馴染まないのに、どういふわけか私にはよく懐いて、奥の書生さんも五ツ店賃が滞つたと、井戸端で風説をしても、旦那々々と、蔭の背戸口を掃いて呉れる。日向の縁側を拭いて呉れる。間には使ひはざま、出しなに路地まで送つて出で、餘處から歸ると前へ立つて、溝板を駈けて入る。嬢さん、古いたとへですが、昔、陰陽師がつかつた、識神とすものゝ、申すものゝ、童童子になつてあらはれたやうな體があけましてね、段々馴れると、了ひ

には勝手口を覗いて見て、黙つて水を汲んで呉れたり、味噌漉を提げて駈出して、所帯を手傳つて呉れたのが、今度は小遣の足になる。

花活に花がないと、桃でも、梅でも、椿でも、莟の内から折つて來る、薔薇も薊も手あたり次第。若い人たちの戀のやうに、美しい、水中に菫の花、一輪ざしに朝顔、とは對手が熊猫だけに、然うは行かんのであつたですが、机を置いた窓の下には、暗の夜でも踞んで居て、ばあ、と覗いて、えへゝ、と笑つて、植込の中を、かさ／＼といふ串戯はしたけれども、其の蛇や蛙をです、床の間の置物に、銜へて來るといふ惡體はしませんで。

小遣の足とい、ふのは、土筆、芹、嫁菜なんどを引掴んで來ては置いて行くです。

春菊といふのがある、よく、其の和物に中毒つて死んだなぞといふ、彼奴ですな。

あれを引ツこ抜いて、一束抱へて來て呉れたのを、氣がさしたから、食べずに置くと、それなり臺所の板敷の隅に干乾びたのを、水を汲む時氣がついたものと見える、ーー私は濟まないが忘れて居た。

ちよこ／＼と背戸口から庭へ入つて、縁先へ廻つ

て來た。

目が光つたので心着いて、私、此の怠惰ものが、机の本から、顔を上げると、旦那は嫌ひか、といふ。何を。春菊よ、といひますかたら、おゝ、然うだ、せつかく持つて來たものを、見えないやうに打棄リもしないで、婆も氣がつかんと、氣の毒だから、然う／＼、一昨日貰つたツけ、とせめてもの事に、立つて勝手許へ出ると、小僧は疾い。

もう臺所口から、眞黒な顔を出しました。

## 十一

「其時に、嬢さん、」

「は、」

と答へて熟と聞く。水の淺葱が、明く冴えて、輕く梢を傳ふにつれ、松の葉の色は沈んで、梢の藤の紫は、艶やかなる其の黒髪に影を添へ、一際顔の白うなつたは、晴れた日のやゝ暮初むる、天天人石の光景である。

筒服の膝を動かしつゝ、辰起は、頭を振つた。

「いや、嫌ひぢやない、人間の血が薫つたら、と思ふはど香の高い、佳い野菜ではあるけれども、斑猫が卵を産んで、春菊の根に巣くふといつて危險だ。玄吉、貴様も食ふな、といふと、旦那大丈夫だ、といつて、嬢さん。ちよろツと其の干からひた菜を攫つて、五六本根を揃へ、泥なりに、かし／＼とやつて、眞白な、貝のやうな齒をきしませたが、ぐツと鵜のみにしたでせう。」

美女の息は細い咽喉を通つた。

「まあ、」

「で其の、好物ならば食べろ、といひます。

鮪を皮ごとぶつ切に、婆さんの手を借りず、春菊とぐつ／／煮ながら、はじめて、小僧とお取膳で食つたですよ。

飯も肴も一口ぢや、握箸でぐいと呑みます。それに驚きはしませんでしたが、日に幾度といゝふことなく大地に轉がるのぢやから堪りません、歸つた跡で、其の坐つた處が、」

と、裾のあたりの石の上を、掻い探るやうに掌以てして、

「ざら／／、砂ーーまあ砂利ですわ　ーー　砂だらけなのには弱つた。

けれども何、其の時分は、」　辰起は靜に手を伸べ

「大の字形に寝て居るうち、世が變つて、疊に草が生えようが、流元が川にならうが、そんな事は構ひつけん、亂暴狼籍な心意氣で居ましたので、其晩一つ鍋をつゝいた時は、小僧と心中をする覺悟でした。

何も春菊を食べてはならないと、亡くなつた親どもの遺言があつたわけではないですけれども・・・・」

笑つたのである。

「はゝゝ、馬鹿々々しい羽目になることがありますものです。

匹夫も其の志奪ふべからず、小僧、意地は立ちましたらうに、其ツ切嫁莱も摘んで來ませんから、怒つたか、それとも、しよげたかと思つて居ますと、嬢さん。

夏の取ツ附の事でした。

朝寐をして居る枕許へ、旦那、これを食ふかよツて……唯今お持ちの苺です。

苺は同一苺ですが、嬢さんが籠をお提げなさつた、綺麗事とは世界が違ふ。それでも奇特と思召せ、蛇蛙の手つかまへ、毒で鍛へたやうな掌へ、二枚、朝ばれの月の雫は其れにもかゝつたやうな、濡色の青々した、苺の葉を、二枚で片掌へ丁どでした、其の上へ實を十ばかり、初物の取たてゞ、觸ると紅が溶けさうな、寝起の目にも涼しいのを、さあよ、と差出したんですが。

まるで、お庇で助かりでもした、猿が其の恩返し、夢枕に立つたといふ風に見えましたつけ。最う此の苺と來ると、去年の師走、雪のかゝつた南天の實を

視めながら、うはさをしたくらゐ、好きも嫌ひもない。

直ぐに飛起きて、縁側で嗽をした。齒に染みて、慄然とするほど嬉しかつた。あくる日になると又持つて來た。昨日の二倍はあつたでせう。段々量が増し、數が殖えて、あとぢや何處で工面をしたか、笊に装つて、凡そ一杯、然も毎朝。

此方もそれがために朝起きをするやうになつて、窓を開けては、其の笊を兩手でづいと天窓の上へ差上げて、背戸を入ると、苺の露に、植込を透す金絲のやうな日が射して、白い雲がちら／＼と、蒼空が出て、ひや／＼と、夜のあけるのを視めました。日日和も續いて、何事もなかつたですが、」

辰起は空を仰いだ、憚る處ある如し矣。

## 十二

「芹、嫁菜とは違ひますわ。

路傍に莟んだ枝でも、梅には鶯といふ主が居る。奥山に咲いたにせい、櫻には歌の主もあるものです。苺のそれも草苺、蛇苺といふなら知らず、大切vに造らなければ出來ない上品、何處にたゞで取つて來る處があります。いたづらも些と嵩じた方で、屹と、餘所の畠を荒すに違ひない。

私は其の事を合點で居て、誰にことわつて來たとも、何處から撮んで來たとも、一言も聞かないで、笊から取つちや頂戴したのです。

實は傲然として、苺を實檢といふ構へ、玄吉が持つて來る笊を屹と見る時の考へは、まるで、敵の首を見るやうな、嬉しい、嶮しい、勇しい、糧に敵によつて、戰に勝つたも同樣。

ですから、嬢さん、手下の小僧に〓がせる。しみつたれな、畠泥坊で居た癖に、自分ぢや修羅先陣の大将が、其眷族をして、梵天の紅瑠璃菓を奪ひ取らしむるやうに感じて、愉快で愉快で堪へられんのでありました。

なぜなら、敵手は世にいふ天女、苺は其の後苑の月かげに實るのであることを、豫め知つて居たんです。

爰に今、天女といふのは、やがて自分を、惡魔、外道、餓鬼、畜生、であつたことに思ひ當つたから申すので。嬢さん、即ち恐らく其の方であらうと思ふ、あなたのお師匠さんのことなんです、如何ですか。」

といつて一息ついた。辰起は答を聞かむず面色したが、それも纔かに一分時、時未だ疾矣と悟つて、美女の、口を開かざるに、先づ又熱心に語り續けた。

「其の時分は私決して、對手を天女と信じない、斷じて魔ものと考へた。それですものな、苺の實の美しく紅なは、やがて世界を燒き亡ぼす恐しい炎の尖の、凝つて冷くなつて居るのだといふことを疑はないで居つたので。

其の癖、界隈では、慈母さんーーえ、これは何です、然う教へたものがあつた。居まはりぢや日南へ出る、定店の、ぼつたら燒の爺まで、私の敵の姫のことを、慈母さん、慈母さんといひました。西洋

で、まどんなとか申すのと、同一寸法にはまるのです。

おつかさんなら、おつかさん、おつかはおつか、おふくろならおふくろだ、第一慈母さんが氣に入らんといふ、此の曲つた根性では。

嬢さん。

慈母さんの庭に、あの苺の實の見事なのは、皆姫様が、私たち貧しいもの、哀なもの、罪あるものを憐んで、月を眺めて落涙すると、涙の露が袖を零れてなるのだ、と、いや、聞いちや居られんーー眞面目に云つて、痰の絡んだ、いまはの際の病人も、吸へばなはると評判をした。

巫女め、善男女を誑らかすわ、と朝晩其方を睨みつけた、棟割長屋の北の窓から。それ、うらがれつゞき、葎つゞきの、落葉すると近うなつて、高い其の棟も見えました。

窪地を一つ、前にも申した、小石川の、茗荷谷といふのを隔てゝ、第六天の森の此方に、徳孤ならず必ず隣ありといふ、有隣とした私立學院。

其の有隣山、學院洞の主人といふのが、嬋妍たる姫の姿の魔物でしてな。」

柔しい目ながら眼鏡の色、屹と輝いてきらりと夕日に。松のみどりは墨となつて、霞は石の根に近く、波を含み、つゝじを籠めて、薄き虹ありて遶るに似たり。

時に天人石に相對せる、二人とも、世に超然として高かつた。

「主として貧民の兒を教育する、着物も食物も與へて、といふので、學校といつても、要するに、一人持の孤兒院、養育院といゝふやうなものでしたし」

## 十三

「家は伯爵だといひました。姫の名は、つき子さん、都、城、と書く。これでも生れが分りませう。春日井姓で、仔細あつて、一生尼法師にならうといつて、高島田の根を掴んだ處を、見附かつて留められた。緑の髪の、元結が最う切れて、はらりと下つたのを、其のまゝ下髪にして、腰を結へに友染の扱帯を解くと、其の足で洋行した。屏風の中の香の煙が、二筋になつて、横濱の沖を遙に見えなくなる。船は香木で刻んだらう、薫が長く、其の居室に殘つた始末。十八の時だといふので。

ふらんすへ行つたんですな、八、九、十、二十、二十一、二、二十三の年、七年目で歸朝すると、それまで仕送を續けて、都城子さんの身體についた財産を、大切に、護つて居た、姫には乳兄弟に當る男が一人、其の金子の事について命を亡くしたといふ事です。

しかし生命がけで預るやうな、志の厚い人が居たお庇に、身上は無事だつた。それを悉皆、有隣學院へかけたのださうで、一頃は養はれた生徒の數が、

三百人上も居たものです。

姫が、鏡臺の引出しから小判を出しての仕事です。扶持をする小兒どもに、枝豆を賣らせたり、早附木を持たせてお辭儀させたり、そんなさもしいものではありません。

生徒の小いのは緋の洋服、叉桃色の、十、十一二、四五あたりのは緑の服。女の兒は、看護婦の着るやうな仕立てにして、これが、はら／＼ちら／＼と、花園の中に戯れる。奥深くピアノが聞え、高い處で鐘が鳴つても、諸行無常と響くのではない。

臺町といふ高臺の、戸外から一町ばかり四季咲ぎの薔薇の中に引込んだ、門まで敷いた小砂利さへ、瑠璃の橋のやうに見えて、櫻が咲けば映るやう、もみぢが散れば流るゝやう。

人は是を、東京の乾の空の、天堂、極樂だと申しました。　苺は其の庭のを盗むんでしてなあ。」

辰起は苦笑した。

「いや、盗むんぢやない、分捕るんだつた。女妖魔の炎を消す、其の猛烈な擧動は、決して圓滿な佛菩薩の所業とは思はんぢやあつたが、自分は昂然として、摩利支天の荒れさせ給ふと同一事だと思つて

居たので。

さあ、それからです、苺は實つて盛りになるほど、戰は愈々勝つて、日一日分捕が多かつた。

ト一日、其の日の朝に限つて、玄吉が冷い炎を引掴んで私の前へ備へない日があつたんです。

鬼の霍亂、かぜでも引いたか、節分でもないに人間に追はれたか、と頻に氣にかゝつてならんのでした。

暮方、些と前、格子の外に、御免下さいまし、といふ媚かしい聲が聞える。

江戸の中でも場末です。初鰹だといふのに、盤臺を、紺の筒袖の下に抱へて、魚屋の女房が、亭主の代理に來る事がある。その他には更つて尋ねる女はない筈ぢやがと、上框の障子をあけると、目の覺めるやうな綺麗な令嬢，水際立つたのが袷の着流し、しとやかに、土間へ入つて、慇懃に會釋をなさると、（臺町の學院から參りました、つかひのものでございます。

御地内の小兒衆に伺ひますれば、苺が大層御好物で入らつしやいますさうで、丁ど庭にありあはせましてございますから、春日井が申します、貴下へ、）

といつて、手つきの籠を出されました。
私はハアといつたッ切。
其の時のおつかひも、年紀ごろといひ、容子といひ、失禮ながら、嬢さん、」
と一目仰いで、面を背けた、頭を垂れて歎息し、
「嬢さん、貴女にそツくりのやうに思ふ、私はどうかしましたな。」

## 十四

「それとも、それとも、嬢さん、貴女も何です、ふと私の此の顔に、お見覺えはありませんか。

勿論、十年經つたです。自分ながら目も柔和に、頬にも肉つき、髯も生えて、其頃の相に較ぶれば、狼が象になつたやうだ。擧動も同樣、爾時は、然やう、先刻苺を頂かうとして、此の天人石のまはりを、嬢さんにからんだ通り、毒蛇のひらめくやうな、鋭いものでありました。

如何です、」　屹となつたが、心弱くて、さし俯向き、

「いや、神佛は見通しでも、罪は淨玻璃に映つても、懺悔は自からいふべきものです。ぢや、嬢さん、煩くも聞いて頂きませうか。」

「其の玄吉とおつしやるお兒は？」

と松を離れて、やゝ近う、揃へた膝に手を乘せて、片手を靜に石に垂れた。妙なる乙女の姿して、打恥らへる狀ながら、爪さぐるべき塵のなきも、袖があたりを拂ふかと、ものの氣勢の神々しさ。

「はあ、先刻の夢が一寸の間で、今日がもし今日

ならば、一昨々日、京都で腹を切つて亡くなりました。」

また四邊を見つゝ、力ある聲でいつた。ーー

新聞もこれを報じたのである。　漣　や滋　賀の都、茶座敷に薄日のさすやうな、おだやかな京の町、俄然として腥く、腸を長く曳いて、東山より伽藍高く、甍の浪に紫雲靉靆く、本山の門の扉に、仰向けざまに突立つた、首をがツくりと下に曲げ、鬼齒は春の霜柱、土氣色の唇を噛んで、凶き星の如き眼を塞がず。出刃庖丁に諸手をかけ、足を踏張つた下腹へ、づぶり拳の隠るゝまで、血汐は雲の渦を卷いて、立腹を掻斬つた、逞しきものゝ姿ありけり。

東雲になりても消え失せず、恐ろしかりける事かな。

まともに門をあけるが最後、天窓から此の鬼をかぶつて、地にめり込む處であつた、寺方は朝はやく、門番が潛を開けると、ぎやつといつて引くりかへつた。時に詰合の衆、肩衣して、手に念珠をかけた親仁、佛心ある上に、夜があけたれば驚かず、靜々と立出でたが、慌てゝ本堂へ引かへして、階を這ひながら、事あり／＼、としはがれ聲。

夥移く烏が鳴いて、忽ち人は黒だかり、僧俗馳違ひ折合ひて、前代未聞と上を下、洛中擧つて色を失ひ、えらいこツちやと大騒動。

やがて三條の片邊に、信州屋甚兵衛といふ、入山形に信の字の、暖簾も古いが、疊も古い、木賃めいた旅人宿のと知れて、昨夜夜の九ツ時分、嵯峨野を斜に、光りものゝ轟と飛ぶのを見たものはあるが、比叡山の、天狗のなせる業ではない、貧ゆゑの往生、未來を助かる近道に、本山の門を借りたぢやまで、南無阿彌陀佛といふもあり、狂人だらうといふもあり、是尋常ごとにあらずとて、立退きの用意をするのもあり。

狂せりや、妖なりや、知らず、但貧ゆゑの死ではない。信州屋は木賃だけれども、東京からのぼる毎に、必ず彼處を宿とする、一個宗教界の名士がある。釋門の大徳、蘆澤辰起氏は、山の俊、水の靈、信越の雪を分け、上野下野の雲を開いて、笈を京都に荷うた當時、信州屋に世話になつて、水菜の浸物に舌鼓を打つた昔を忘れず、今も定宿とする習。

近來、當地本山の財政悲境に陥りたるため、其の建設補助の許に、蘆澤氏が管理にかゝる、東京に於

ける、なにがし學枚、存亡の問題につき、昨週、以來〜ルビじやうらくちう》—上洛中と聞く。自殺したる快漢は、名を玄吉といふ氏の從者なりと、新聞は種々〳〵にして、同一意味

「小僧は二十歳になつて居りました。尤も自殺をする前夜、それとなく暇乞をした。其折に、小兒の時、臺町の天堂を、自分が放火して燒き立てたと申しました。」

## 十五

「其の時私は、敵が亡びたと雀躍した。魔窟が燒けた、と祝したです。

味方の勝利はそれば かりでなかつたので、豫ての心願ではありましたが、迚も出來ない相談と斷念めて居たのが、京都の本山と調つたですな。

城の先づ繩張りが出來て、其處に、同宗門の子弟を、及ばずながら私の名で預ることになつたのでした。次第に規模も大きくなり、學校も立派に出來、博士學士の講師も入つて、生徒に俊才も顯れる、寄宿舍も建つ。講堂教室も落成して、一萬餘坪の庭も開け、松が栄える、螢が飛ぶ、萩も咲く、雪も降る。

此處を學生が揃ひの制服制帽で、肅然として出入りをするのを見ると、夏は其の色の白いにつけ、然もない時は黒いにつけ、さあ、恁うなつてから思ひ出すのは、緋や桃色や緑を着た、其の花園の小兒たちです。

あゝ、都城子さんの學院が今もあつたら。帝都に兩々相對して、此方に靈界の月が照れば、あちらは

浮世に花を咲かせて、世は嘸風情なことであらう、賑かだらう、樂しからう、と身に染むやうに思ふにつけて、次第に空恐しくなつたのは、私が、自分の罪なんです。　學院は燒け落ちると、天堂は滅びました。慈母はそれなり、行方が知れなかつたんです。

凡そ私が思ふやう、呪つたやうになつて了つて、跡は叢になりました。蟲は鳴くがピアノは聞えず、花は咲いても鐘は鳴らず。寂漠として、孃さん、こぼれ種の、苺はちら／＼實るんですが、蛇が多い、巣だといつて、小兒も足を入れんのです。

あゝ叢になりました。

が、孃さん。

聞し召せ今鎌倉は麥畑ぢや、いづれか秋に逢はで果つべき。

本山の建設で、東京に私が預る、唯今申した學校も、一昨々日・・・・然うです、玄吉が死んだ、其の前一日、同一叢となるべき運命が最う定りました。

燒けたのではない。

漸く學校も完成して、略礎も定まつたと思ふ一昨

年あたりから、豫て亂れて居た本山の財政が、蔽ひ切れない破綻を生じて、次第に學校に影響し、雲行きが怪くなつて、會計の手元が暗く、果は講堂の電燈も闇になつた。門を流すやうな雨は降つても、地固るわけには行かんで、日ましに土臺が傾くのです。

それがといふと、數百の生徒を教育する、衣食ともに、殆んど本山持であつたからで、私一個人の借金も、千を算へるやうになつた。

いよ／＼土臺から覆つて、學校は骨ばかりにならうとするから、京へ上つては談判し、東へ歸つては交渉して、今月は今十日、十日の内に三度といふもの、東海道を上下したです。

最後の會議に、本山樞要の地位に在る、出家三十五人、最も私ばかりでない、是がために、國々から馳登つたのが澤山あります。づらりと大書院に座を列ねた時、私は先づ其の到着の人數を算へて、あゝ、こりや不可ん、と豫め、それまでは未だ一縷繋いだ望みも斷つた。が果して廢校といふに決した。で三十五人も、恰も私を葬るために經を讀んだと同一形。

なぜ其の人數が、不吉であると申すのに、何處の諺にもありはしません。唯其の數が、十年前、都城子さんの有隣學院の燒けたのを祝して、地内の廣場に、長屋中の澤庵桶を持出させて、臺にして、雨戸を渡した卓子の上に、馬な、豚な、葱のぬたなんざ摺鉢ごと、貧乏徳利をすく／＼竝べて、立食の大盤振舞。

まさかに其の祝とはいへません。それ火事だ、學院だ、天堂が燒ける、といふと、駈か出した、鄰はなし、野中の煉瓦づくりだから心配はない、幻燈の火事を見るやう。」

## 十六

「然も、眞晝間燃えるんです。背後は菟荷谷なんですが、學院は高い處、崖になつて、竹藪がありました。其の崖下の家なんぞも煙をかぶりながら平氣なもので、煙草を飲みながら視めて居るやら、小兒を負つて、ねん／＼ころりよ、なぞと見物をする女房が居ます。大勢の中へ交つて、私もしばらく見て居ると、向うの坂から十四五人、一隊旋風のやうに、颯と、足竝を揃へ駈けつけた、いづれも同一火事裝束。

何の組だらうと見る間もなく、右左へ哄と開いた彌次馬の中を、眞直に縦に抜けると、眞前にたつた一人が、崖下に繞らしてあつた、藪を其まゝ倒して使つた、六尺ばかりの竹垣へ、身を揺るやうに乗りかけて、兩の肱を弓なりに、兩方へ引裂くと、ばり／＼といふ音と一緒に、突立つた頭巾の中から、凜々たる聲をかけて、

（耶蘇教の家だ、消すな！）といつた。

途端にぢやつた、吹下ろす風とゝもに渦いて來る煙に紛れて、同勢殘らず藪の中へ入つて了ふと、急

に静になつたやうな心持がして、ばち／＼燒けるのが壯に聞えた。

其處でゞした、最う大丈夫と、引返して、其の祝なぞとは申さん。今日は誕生日だ祝儀をする、小兒たちは買出しに、女房がたは煮方に廻れ、甘味連には鹽煎餅餅、柏餅を振舞はうと、號令をかけたです。此處で地内、五十坪ばかり、半月形に總井戸を取卷いた、長屋中、大掃除の騷ぎになつて、釜の下をもしつける、七輪から火花が飛ぶ、車井戸がキリ／＼カラ／＼。

通の板橋街道は、消防夫が引揚げる、見物はぞろ／＼歸る、其内に支度が出來ると、お長屋の亭主連、ぼてふりやら、植木屋やら、仕事さきからぼつ／＼戻る。おそくなつて、何と、老人の冷水で、火事見物に出かけた、中風症の親仁が到着に及ぶと申した工合で、雨戸を圍んで飲み出しましたな。

いや恐しい、惡いことには染り易く、私の惡、隣に及んで、小兒二人、手をひき、おんぶで母子三人、遠く市ヶ谷のお濠へ行つて身を投げたものも長屋中にありましたが、そんなに食へなくなつてさへ、學院の慈母さんには、世話にならないといつたやうな、

氣を揃へた外道どもが、羽目をはづしたから堪りません。

裸踊り、鮹踊り、野毛の山からノーエとやると、古風にかん／＼のうを刎ねるのがある。七十になつた婆さんが、べこ／＼三味線に調子を合はせて、猫化同然。いや、貴女の前ぢやが、其の失態、お話にはなりません。

月夜になつても、影法師が騒ぎ止まんで、中には何です、自腹で、花火を買つて來て、鼬を放す、線香を卷き散らす、癇癪玉を踏み潰す、どん／＼ぱら／＼、其間にや聲を合せて、萬歳、なぞと吶喊の聲だ。屋鳴震動、投げ上げる花火が破れて、井戸端の柳の葉が、夏のはじめだといふのに散るだらうではありませんか。夜の九時半ごろでした。呆れ返つて、洒落らば酒落ろ、死なば死ね、此万人方は娑婆の人間、縁の切れた魔道ぢやと、斷念めたものゝやうに、おもての人立もなくなつて、庚申塚のあたりまで、寂として了ひました。

踊るにも、唄ふにも、汐のさしひきがあるかして、ぴたりと水を打つたやうな。其の時づいと立上つて、（耶蘇は磔ぢや、天堂は燒けた、めでたい！）と大

音にいふと、一同哄と諸聲に、

（萬歳！）

と高らかに唱へた途端でした。キラリと光つたものがある。

キラリと又路地口に、二條キラ／＼と空に流れて、角長屋の破廂と、すれ／＼に蒼い星が流れたと思ふと、沈んだ陰々とした靴の音、肅々と響いて來て、地から生え抜いたやうにすツくり、野天の大卓の前に突立つたのは、銃劍を高く、しつくり肩にかけた二個の兵員。

一目見ると、蜘蛛の兒を散らすやう、月の隈々へ皆隠れた。中には、かひやの下へ這込んだものさへあります。よい／＼殿は、からの澤庵桶を、倒に被つて踞む。」

## 十七

「別に仔細はないのです。地續きの近い處が、陸軍省の所轄地で、大な焔硝庫がありますから、番兵さんが注意のため、今の。バチ／＼を檢めに來たので。

（花火ですか、宜しい、）　と、直ぐに引返して地内を出ました。劍の、恐しくどぎ／＼したのが、廂合の闇に消えると、薄ぼんやり、急にそこらが明いやうになつたですが、月が曇つて來たのです。唯……

（旦那、旦那、）

と呼ひます、私の事です。見ると四邊に音もしない、鼠が靜まつたやうなんです。井戸繩のきしむのが、ぎいと聞える。

（旦那、旦那、）

と呼びます、嬢さん、變な調子だが、玄吉の聲ですわ。

はてな。

覗くと、井戸の中に入つて居た。」

「其の方なんでござんすね？」

頷きながら一呼吸つき、
「然うです。ーー（繩を引張つてお呉んなさい。輕いからわけなしだ、）
といふ。井戸繩は、一つ中央で捻つてありました。緊乎と掴むと、片釣瓶に密と乗つた、ぎりゝ、ぎりゝ、六尺ばかり、上までは未だ二三尺、間があらうと思ふのに、ひよいと飛んで、井戸がはへ、大な蟇のやうに踞んだのです。小僧の輕業は見事だつたが、不意に力が抜けたんで、私は繩を曳いたまゝ、仰向けにづでんどう。」
「まあ、貴下お危い、」
顔を見られて額に汗、横ざまに掻撫でゝ、
「釣瓶が、ぐわツと、上の車に喰ひついて、何の事はありません。龍が口をあけたやうに、半分殘つた水を吐いた、天窓から身體、びつしよりです。
駈けつけたのは、玄の親仁、私を抱きながら、
（馬鹿野郎、）
と叱りますと、（爺が前へ遁げたぢやねえか、驚いたい、驚いたい、）
いや、一言もなかつたですが、玄小僧、其日は又、餘程水が戀しかつたものと見えて、晝の内も、何か

撮んぢや食つて、駈け廻つて、きり／／扱み上げては、釣瓶から口のみに、ごツく、ごツく、虎が渇いたやうでした。

私が水を絞る時、かこひものゝをばさんは、内から路地を閉めました。これで、幕は切れたのですが、嬢さん、其の時のです。」

參會の連判状、小兒を除いて男女とも三十五名と註したのであつた。

「お客が同一數ですものな。」

名は誕辰の宴にして、

「都城子さんの學院を、呪ひおほせた祝ひでせう。最後の會議に三十五人、私の學校の存亡も、前から分らんで何うします。

丁ど、垣根を分けた消防夫が、

（耶蘇の家だ消すな。）と聲をかけたを聽いて、學院は根太までも殘るまいと、安心したのと同一事に。

せめて、其の燒けるのを、崖裏から見物せんで、表門の方へ廻つて、薔薇の花で縁を取つた、絨氈のやうな、芝生の中で、彈きかけた洋琴の前に、其まゝ悄れて立ちなさつた、羽衣を盗まれた天女のやうな、

姫の姿を取巻いて、緋と桃色と緑の衣服の、愛々しい兒たちが、窓々を傳ふ炎を見ながら、周章狼狽して悲しみ惑ふ有様を見ましたら、少くとも三十五人で、酒は飲まずに濟みましたらう。

實は私、言ひやうのない事をしました。

何と、それに、其の火事で、人が二人といふもの死んだです。生徒の内ではありません。保姆が一人、男教師が一人。慈母だの、天堂だのいふ語を、小兒にも教へ、飴屋にもいはせたのは、此の人たちで。」

## 十八

「其の男の教師にです、先刻饂飩屋の店頭でふと出合ひました、のたくつたやうになつて居たひよろ／＼と長い旅商人體の男が、顔色もそツくりです。脊も又あのくらゐ長いのは、世間に澤山あるものではない。

尤も、姿はまるで違ふ、教師は、其時分からもみあげを剃込んで、第一色の蒼白い、油できちんと髪を分けて、雪のやうな襟の幅、縦に五寸といふので、いつも薄色の服をつけて、竹馬に乗つた小兒のやうに、大股に、ひよい／＼と。

これが、天堂々々と、階子をかけられるやうに稱へると、慈母さん、慈母さんと、教へて、腹へおそなへを盗んだやうに、白い服の外からもだぶ／＼見える、大な乳を、大道で、直ぐに飲ませさうな見脈をして歩行いたのは、四十恰好の女教師で、此の又づんづら短い事、横ぶとりに肥つた事。顔といひ、容子といひ、ぶく／＼とした工合、眞鮫鰒を風呂敷に包んだやうで。

よくあの界隈を晩方なんざ、二人竝んで歩行いた

もんです。で感心をするものは、あの青竹を女教師の胸へ立てゝ、其處から小兒を天へ昇らせるのであらう、と蔭でいつた事でした。　何も、學院の姫が、故と不思議なものを選つて、廣告につかつたわけぢやないので、膨れるものはます／＼膨れ、長くなるものは愈々長くなります。どうにもいたし方はないのです。

いつもは此の人たち交る／＼、遊戯の時間には洋琴を庭へ持出して、小兒たちの、櫻々、などと唱ふのに、合はせるのが習ひでした。

姫は、唯、召ものゝ袖の綾が、窓かけの切に映つて、奥床しく見えるばかり。花園の花に影がさすと、綺麗な蝶の行く方へ、其の窓、此の窓、あの廊下、其處を通らるゝ、と思ふに過ぎず、戸外へなぞ、めつたに出た事のない方が。　燒けた其の日の晝に限つて、自分で洋琴に向つて居られた。騒ぎの前に、垣間見たものがあつて、お十八九にしか見えなかつた、と驚いて申しました。　二十五です。

其の日は學院が出拂ひで、室内には人つ子も居なかつたでせうな。

玄の奴は、藪を潜つて、其處へ裏口から忍打込ん

だ。日中だのに、桁を走り、柱を傳ふ、恐るべき火の鼠なんです。

小遣で買ひ溜めた、石油の鑵をぶら提げて、窓掛、襖、額、戸障子、打灌いだあとへ火をかけたんです。高い處は、口へ銜んでふきかけたつて、勿論、形も影もないものゝ手傳ひもあつたのでせう。怪しい獣が、駈け抜けるやうに、くる／＼と廻つたあとから、火と火と八重に、十文字に、繋り合ひ、結び附いて、筑紫の不知火見るやうに、數限りのない炎になつて、ひら／＼と燃え出した。

花園には姫が彈いて、小兒が唱ふ、櫻、櫻、蝴蝶、蝴蝶／＼でありましたのに。

姫は唯白い片手を擧げて、小兒は殘らず留めました。

肯入れないで、乘込んだのは、例の肥つたのと長いのとで。一人は玄關へカラアが支へ、一人は入口へ腰があふれて、重つて、押し合うて、しばらく淀んでもがいたのは、入るなといふ、天のしらせ。

部屋々々／＼殘らず、火が廻つて居るのですから、やがて一緒に入りツ切、煙に卷かれて出て來なかつた。其の時分にや玄吉が、おもてへ廻つて見て居たさう

です。

物心覺えてから、玄吉は、自分ながら、不思議な事があるものだと、いつも其れを思つた、と申して、其の自殺をする前の晩。最後の會議の濟んだ夜です。はじめて放火をしたことを、私に話をしたことですが。

苺を盗むのを目つかつて、二人の教師に縛られた、腹いせに、鍋墨を拵へて忍び込んで、方々へ噴き散らした。

丁度其のあとが、故としたといふではなしに、殘らず火になつたといひました。教師二人の顔とからだへ、先づ眞さきに塗つたのですつて。

あゝ、此の事は未だでした。」　といつて小首を傾けた。

## 十九

それよ。

「嬢さんによく肖たといひましたな、其の學院の、お使の參つた翌晩の事だつた。　餘り前後になるやうです、其の賜物の籠は突返して、（お使者がら恐縮です。お庭の紅い實は、ありや、毒草だと思つて苅らせるのです。歸つて姫様に然うおつしやい、苺なら入らんのです。決して頂かん。）

と冷汗を掻きながら、やけにふてくされを申して、障子をぴつしやり遁げ込んだ。

矢でも鐵砲でも持つて來い、盗賊になつて縛られて遣るまでだ、とふんぞつて寝ましたが、玄吉が案じられる。日が暮れても顔を見せないではありませんか。

しかし雇ひの婆さんに聞くと、歸つては居るので、何故か今日は神妙に内に畏つて出ないといふ。別條はありません。

あくる晩、夜が更けてから、丸窓をコト／／と敲いて、キキと笑ふ聲がそれですわ。机の上から、かたりと開けると、いきなり、ぬツと手を入れた、狸

を見たやうに眞黒なんです。何だ、と聞くと、（旦那、昨日は遣損なつたい、三すくみだぜ、旦那。おいら、なめくぢを見たやうに、苺の葉にたかつて居ると、黄色蛇の教師の奴と、蝦蟇の年増めい、手をつながつて來やがつたつけ、しら／＼あけによ。

見つけると引挾んだい。おゝ、苺盗賊はこれだ、いふと、引掻いたが間に合はねえや。長野郎はひよろ／＼だが、ふとツちよめ、うむといふと引抱いた。恐い力ですぜ、呼吸がつまつた、大いからね、蒲團蒸をされたやうだ。湯氣に上つて殺されさうだ、ぐんにやりしたい。

處をおいらが帯を解いて、縛りやがつた。あとでね慈母さんのお情だ、助けて歸す、盆に禮持て來いが聞いて呆れら。

口惜いからね、長屋中を駈け廻つて、臺所へ這込んぢや、鍋墨をこそげためて、溝泥で捏ちたぜ、斷切るやうにねばるからね、水で解いた、おまじなひに唾を入れて、空瓶の口を繩でからげて、抜けねえやうに、）

と鼻の下を、中指の黒いので引擦つて申すのに、（恁う鼻膏よ、づりツこけねえ、傳授事のおまじな

ひだ。其處で以てからに肩へかけて、日が暮れると、眞晴な庭へ潜り込んで、月の出るのを待つたんですぜ。

こんな晩にや、屹と二人でつるんで出やがる奴等だ、と狙つたやうに、お月樣が歩き出すと、影ツ法師が動いて來やがる。

兩手へどツぷり、口へも一杯。はらんばひになつてると、姫さまが、どうとかだから、外國の誰とかを、引張り込んで、おもてから錠をおろしや、右から左へ禮が何とか、いくらとかで、然うすりや、あんな人だ、口憎いとかで、死ぬとかだ、あとでは金子も、學校も、私たちが、何とかだ、とべちやくちや餞舌つて來たんですぜ。何とかゞ何うとかでも、そんな事は構はねえや、見やあがれ。）

と發奮んで、敷居に飛附いて、話しましたが、何でも、ちよろツと出て、べた／＼と塗りながら、脊高の身へ駈け上ると、わツと反りかへる鼻へべとり。うむと呻つて一倍膨れた、女教師の胸を張つて仰向く顔へ、烏賊が吐くやうにふツかけると、地響を打つて、苺畑へ、ばあと据が擴がつた。束髪の上を土足で飛んで、一目散に遁げ出すと、やう／＼人心地

になつたと見え、彼處だ此處だと、庭中を、よた、よた、ひよろ／＼。

玄の奴は、草がくれに玄關へ又ぬいと出て、敷石の上へ、どぶ／＼と一ツたらし。瓶を抱へ直して、二人の出たあとゝ見える、校内へ密と入つて、部屋々々を抜けつ潛りつ、額も、窓かけも、手當り次第に、鍋墨を塗つて通つた。石膏の美人像も、マドンナの油繪も、講堂の扉も、あくる日は墨だらけ。恐らく夜を除いては、生徒の色も、花の色も、黒いものといつては、姫の髪ばかり、と思はれる學院中、鬼の足痕のやうに汚されました。

別に目印にしたといふわけではなかつたのださうですが、石油は自然と、皆其箇處々々。つまり鍋墨が炎になつて、蜂の巣のやうに燃え出したんです。」

## 二十

「燒落ちると雲が出て、猫、狐、狼、狸、私の祝宴が果てた時分、ーー　一面に曇つたのが、夜が更けて、寂寞して雨になりました。で、何處まで怪しからんか、數が知れない。傘をさして、密と木戸を開けて出たのは、慰みに燒跡を見ようといふ了簡なので。　大塚の通りは、朧々〳〵とシツとり濡れて、淀んだ河を渉るやうで、づツと果が黒い雲、夜目に浮上つて一條長い、惡魔の通る路なんです。

草深い土手の間と、樹の下の枝道を、二ケ處、眞暗な中を抜けましたから、臺町へ上ると又別の夜になつた。背後に森は控へても、學院の燒跡は、途中暗かつた目に、茫乎とはしたが明るいのです。

混雜に押倒した門の上を、ばり／＼と足駄で蹈むで越えた時は、一將功成つた意氣でした。

泥に塗れ、飛火に焦げて、むら／＼と散り亂れた、薔薇の花の、なごりの香を吐くのが煙になつて、あつちこつち、まだぷす／＼と燻る中に、芬と匂ふも可い氣味ぢや。

時は經つたし、雨にはなつたし、火の氣は塵も殘

つちや居ません、勿論人一人居るのぢやない。前途に、さつくりと稲妻形に、宙に龜裂の入つたのは、外圍の煉瓦の殘りで、其の物凄く、冷たさうだつた事、魔を封じた塚のやうです。

足許に障子が一枚落ちたのも、晝間燒けたものとは思へず、大波が來て、滅して、勝鯨波を擧げて、追いたあとゝ考へられる。

然ういへば、何處にか轟といふ音もする。

燒瓦の缺、木の焦げさし、黒く轉がつた石塊なんざ、女鳶に攫はれて、後に天狗にならうといふ、緋や緑、桃色の卵の殼だな、見ろ、苺も砂利になつた。

……　ざら／＼と足駄の尖に攪廻して、燒焦げだらけの芝の上へ上りかけると、若葉の枝ぶり、梅か、と思ふのが、薄墨で描かれた許に、見事な芍藥の花が一輪、すら／＼と咲重つて、花片の刻はなく、なよやかな姿がありました。

透すと人です。

慄然としたが、勝つて驕れる愚將ぢや。

傘を斜に取つて、跫音を忍んで、寄りますと、それば かりは殘つたらしい、オルガンでせう、樂器の前に、椅子にかゝつて、額をおさへたなり、譜の上

に肱を・ついて、呼吸もなさゝうな洋装の後姿。

兩の肩のふつくりしたのが、髪と一緒に揺ぐのは、此の花に降る霧雨が、霞となつて靡くのです。私は泣いて居るのであらうと思つた。

密と、上へさしかけたんです、降伏した敵將を憐む雅量、と大得意。

傘は、燒崩れた煉瓦の裂目の、最も高く、就中鋭いのとすれ／＼に空でしたし、糠雨ですから、降りかゝる音もしなかつたのですが、氣勢が襲つたと見えて、俤に立つて、顔を上げて、」

と、ものに怖ぢたるさまして、辰起は手で額を蔽うた。

「私と屹と向き合つたんです。一目見たのを忘れません。

あゝ、釋尊も、基督も、意地も、我慢も、信仰も、我身も、此世に忘れ果てゝ、惡かつた、と氣がつくと、石のやうになつて了つた。腰が碎けて、あはや、手をつかうとします處を、翻然と出た小さな黒い影法師が、玄吉です。私が負けると見たか、姫をドンと突き遣つた。二三尺離れた隙に、前後忘却、疵だらけになつて遁げたんですが。

思ふまゝ、清洒に装はせて、學生をづらりと前に、

講堂の正面に、自分、倫理を説く時も、時々目が曇つたのは何の為、其の夜を幻に見るからでした。」

## 二十一

「一昨々日、愈々本山の會議が濟んで、悲しい運命の極つた時、信州屋といふ下京の、定宿へ歸つたのは、あかりが點いて、しばらく經つてからでした。

玄吉は、ごろりと肱枕で寝て居たです。其時に限りません、京都の上下ばかりぢやないので。三日學校をあける時は、屹と玄吉を同行しました。

ともを連れる用はないが、私の目が届かない處ぢや、どんな事をしやうも知れないからです。

飯は、と聞くと、待つて居てまだゞといひます。私は寺で濟ましたのに。急いで食べさせ、遠慮は入らない、些と見物をして來いといふと、上方の風はぬる／＼して厭だ。　そんなことをいふなと、云つて、無理に小遣を持たして出した。

私は一人で落瞻して居たかつた。玄吉のむず／＼したのは、いくらか顔色でも惡かつたのを氣にした所為と見えるんです。

一杯機嫌で、威勢よく歸つて來ましたが、更めて手をつきました。

私は丁度、學校を閉ぢるに就いて、傭を解いたり、補助を留めたり、さしづめ途方に暮れようといふ少からぬ人たちの名を、手帳に記して、床の上に、坐つて、ぼんやり行燈で讀んで居ました。

（旦那、私ア餓鬼の内から、長いお世話になつたんですが、此場ッ切お暇を頂きます。）

と悄れながら、いひますので。

（いや、學校は止しても、お前は違ふ、私と一緒にくらすんだ、）

ッて大方、會議の様子でも聞いて自分も入らない人間になつたから、と氣の疾い奴、先を見越していふのだらうと思ひました。

玄は何です、怪しからんお話しですが、奴の親仁ですな、かこひものゝをばさん、と申したのと密通をいたして、遁げまして、勿論小僧を棄てゝなんです。

で、私が世話をしました。學校へ入れようとすると、本はいやだ、小使なら遣る、といつて、望なんで、人の五人分立働いて居ましたので。

（否、旦那がお見棄なさらねえのは存じて居ります。おもてゞ、様子を聞きますと、學校はたうとう

立行かねえと極つたつていふことですが、就いちや、）

と、此處で放火をいひました。餓鬼の内は小さくつて、網の目はこぼれて居たが、罪の免るゝ處はない。こんなものと、深い中で居らるゝから、天地自然に其の崇りで、學校が潰れるんだ。惡縁を切りませう、斷つて然うしないと氣が済まぬ。尤も生命は惜い、暗い處へも行きたくない、發れるまでは秘して居る氣、しかし思ひ立つた事ですから、お別れ申すだけは、此の場切ツて、何うしても肯きません。

昨日なら又もしやといふ事もある。不可んと相談が極つてから、身を退いて何になる、罪は私も同類ぢや、半分背負つて償はうからと、いつて聞かしても頭を掉つて、曾我の五郎を御覽なさい、由井ケ濱で斬られようと、首の座に直つた時、赦免の上使が駈けつけたつて、今にも相談をやり直しの、學校を續けるといふ電報が來ないと限らぬ。是非、といふので、味は知らんのでありますが、弟にでも分れるやうで、一晩眠られなかつた翌朝。

洛中は一夜の中に、本山の門の前へ火山が湧いた

やうな沙汰です。

まさかと思つたが、行つて見ると、目を開けて死んで居ました。

私が庫裏へ抱へて入つた。懐中に、釘の折を、噛んでたゝきつけたやうなや字で、

ーーおいらは死んでも突立つてら、學校を倒すな、頼むぜ、坊さんーー

と、してあつた。

頂いたのは私ばかり、呆れるのもあり、笑ふのもあり、馬鹿々々しいといふのもあり、大概は狂人あつかひで、中には眞面目に怒つた人さへありました。

人生意氣に感ずですが、金子のないには勝てんのです。虎は犬死しましたが、骨は私が佛にした。で、戒名だけを膚身につけて、悄々東京へ歸り道。」

## 二十二

「急ぐ張合もありませんから、彦根の中學校を預つて居ます、大學時代の朋達がありますので、それへ道草、道草が嵩じて、彦根から又石山へ、湖水を引返すことにしました。　學校へは屠所の羊、半日でも遅く歸らう。面と向つては、さていひ憎い。いよ／＼廃校のことの趣、これを、一同、教授連と學生へ、手紙でいひ送つて、久しぶりで、・・・・・・・一杯飲んだ。

日暮前に、湖水を船で、石山へ渡つたんです。

今日のやうな好天氣、月が出てから景色は見よう、と取つて置きにして、日のある内は閉籠つて居たのですが、徒然でなりませんから、其處で、船中にありあはせた、講談本の、此處に、酒の瓶、鮒の鮨と一緒にあります、此の義士傳を讀んだのです。

お話し申すまでもない、大石が城を開け渡す一段になつて、思はず俯向けに伏せました。最う讀むまいと思ふと猶見たい、三度同一ところを視めながら、何となく、恁う、胸が迫つて來て、心が闇になりますので、あゝ、と自分で顔を掉つて、霞んだ氣がし

ますから目を擦つて、それから駈けるやうにして甲板へ出たのです。

何時の間にか夜が更けて居ました。豫てそれを見ようと樂みにした、水を切る舷の波の走るのが、銀を流すと、白い瑠璃の階が、星を鏤めてきら／＼と月の下へ揺れかゝつて、神女の、月宮殿に朝する姿が、あり／＼と拝まれると申します。

それには月が高過ぎましたが、霜のやうに輝いて、自分の影の映るのが、可惜いほどな甲板。

湖水は、唯渺茫として、水や空、南無竹生島は墨繪のやう。御堂の棟と思ふあたり、影がさし、月が染みて、羽衣のひだを見るやうな、水無月の富士山の頂に、雪の枝打つて細いのを、遙に望むやうでした。

勿體ない、其の島影を拝むのにさへ、神女は宮殿に住まるゝ、とお堂のあるのが羨しかつた。私は大石の心を察して、背後を向いて泣きました。

學校を家とした、教師に別れねばなりません、生徒に離れなければなりません、都城子さんの學院が燒けた如く。ト船は今三界に住家のない、孤客を乗せて、琵琶の湖心を、晩春の月皎々と更けた夜、撥

を動かして走るのです。浪の音は悲哀な調で、樂器を鳴らすやうなんです。

然うすると、孃さん、其の中空の何の邊にか、學院の姫が居らるゝやうです。何となく見えるやうです。もし一點の、美しい、雲の形でもありましたら、直にそれを都城子さんの姿ぢやと思うたでせうが、澄み渡つて星もない。

水には時々隈がさす。けれども、それは水草が漾ふのです、魚が遁げるのです、覗く自分の影なのです。

以前學院の内を、お歩行だつた氣勢にも、窓かけの色にかさなつて、薄く紅は透く、淺く緑は透く、輝く指輪の黄金の蕋に、慕ひ寄り憧れ寄る、蝶々の翼は映つても、つひに姫に、黒い影があつたことを見たものはないのです。

ですから影もない、形もない、衣ものもない、袖もない、縫目もない、絲もないが、唯其の時、湖のいづれにか、いや、いづれにか、といふよりは、月と水との間に、みち／＼ておいでのやうに感じられて、身の措き處がなくなりました。

で、唯恁う、甲板の冷い欄干に取着いて、俯向い

て居たんです、然うする内に、水が恁う、」

と、辰起は左右の手が、大氣に交る水の影、樹の間の波の影を撫でた。雫も露もかゝらぬが、手首冷たく覺えたは、不覺の涙のあとであらう。松の葉は、はら／＼と、琵琶の音じめに紛うたのである。

「顔へ近くなつたやうな氣がしますと、湖は狭くなつて、瀬田の橋が白みました。」

## 二十三

「白雲がかゝる、松が見える、石山寺はほの／＼と、漁師町は遠見の青柳。

昨日石山へ參詣して、彼處で海を視めたですが、昨夜の景色が忘れられず、又つかぬ考への起つたのは、今にも背後の襖をあけて、紫式部のやうな姿で、姫が出てみえはせんかといふので。

もし然うしたらお目にかゝつて、一言わびが申したい、と何となく襖一重、むかうが千疊敷の廣間でゝもあつて、端厳微妙の方が其處にといふやうな氣がして、一日。

黄昏に石段を下りる時も、のぼり下りの見物の行遙ふ中に、自分だけ、一人、うしろ髪を引かるゝやうで、一段づつ、あとが霞に包まれるかと思はれてなりませんくらゐでした。

石山では、玉喜屋といふのに泊りましたが、宿の裏は、すぐに琵琶湖のへりでありますから、昨夜も月夜で寝られませんので、寝衣に着かへてから、裏へ出て、澪標に竝んで、立つて居ますと、亭主が氣の好い優しい男で、縁臺を出して呉れたんです。

此處で、ひがひと鯉を肴に、さしむかひで清酌して、夜更けるまで、竹生島の話をしました。

胸もすが／＼しくなつて、此の邊に庵でも結びたいやう、何事もしばらく忘れたので、昨夜の夢は穏かでしたが、彼處此方二階中、はた／＼と夜があけると、すぐ又浮世の人になつて、汽車に乗ると、早や一足づゝ、東京へ近づいて、皆の失望した顔を見るのが、目の前に泛ぶのです。

ト此の驛で、汽車に故障が出來たんです。停車場前は俄に市が立ちましたが、私は一人、あの橋を渡ると、急に晝が夜のやうに寂寞となる、故道へ、ぼんやり入つて、下の里へ取つきから四五軒目にあります、饂飩屋へ入つて、一寸晝食を認めましたが、給仕をしてくれた、其處の娘に、此の天人石の名所を聽いて、名も湖も懐しさに、上つて見ようと出かける店で、よく似た男といひました、　ー　旅商人に逢つたんです。

私は志を得て、長屋から越す時も、ばら／＼と木の葉のやうに背戸庭へ澤山來て、縁側で馴染になつた、雀に、唯其のわかれるのが、心さみしく思つたですもの。

燕の巣が懐く、あゝ、これも家があると、羨しくツて、お恥かしい、しばらく、店前を塞げたですから、煙草は用ゐんが買ひました。商人に尋ねると背中の兒の、名を、げんきち、と申すではありませんか。　其の目も光る、因果は続つて、日……も、月……も、此處で結びがつく事と覺悟をして、恐々〳〵古寺の門前の石碑を密と讀んだのでした。

いや又、宿の片側の、道具屋、金物屋、石屋の店の不秩序に混雜した、商ものゝ竝び工合、片側の荒れた形、右を向いても、左を向いても、怪しや、燒あとに肖たと思ふにつけても、魚屋のあるじに、恐しい石の下にしゝぴしほになつた鮒の、三年經つた、といはれた時。ーー

あゝ、姫に對し……自分自體の處置は、其の粕桶の中であらうと、慄然と身の毛のよだつた所為か、石に上つて、湖を見つゝも、心を責めて、船中から、給仕に頼んで持つて來た記念の義士傳を讀むうちに、」

あまりに胸の切なさや。

## 二十四

「身の置處はないにしろ、水の底にも墓はある、何故、其の時、湖水の魚にならなかつたらうと、胸は時間を刻むやうに、がく／＼引き入れられさうに、氣が滅入つて行くんです。

然うすると、此の石に曲げて、顔を乗せて居た肱も、手首の方から、力が抜けた、身體は松の梢なり、宙に居る心持になりますと、まばゆくほてつたのも、冷々／＼して來て、體中しびれたやうで。　此處へそよ／＼と風が來て、此の波の景色が動くたび、常磐木がこぼれもする、こぼれた葉もさそはれる、それが、はら／＼と頬へかゝつて、さらりと當るのが段々／＼細く伸びて、これから、これへ、」

と頸を、肩を。

「撫でたり、絡うたり、擦りもする。其の中、びしよ、びしよ、何處ともなく音がする。來た路に清水はなかつた。樹蔭も乾いて、大雨に崩れたらしい窪んだ處も、砂利に山躑躅が赫とこぼれて、ちら／＼漁火の燃えるやうな、山々は青々／＼として緑滴るばかりながら、凡そ此のあたりの地は、不殘、琵琶湖

へ絞り抜いたかと思ふまで、水は些ともなかつた筈。

天人石は上にあつても、罪ある自分が上るのだ、松の葉も針の山、と恐を抱いたほどだつたに、待て、此の石にばかり泉が湧くか知らんと、がツくりなりに、ぴつたりつけた。耳がひやりと冷たかつた。

唯颯々として何ものか地軸を吹いて行く氣勢でした。

やがて、それも聞えません。

床にも、枕にもした此の大石が、遮るものなく、繋ぐものなく、ねばりもせず、もろくもなく、根から離れて、ふは／＼と浮いて、おなじ處を動くやうな氣がするので、心着くと、寒くはないが、光が骨に浸む佳い月夜で。

何と！　四圍皆渺茫たる水なんです。其の有明の富士の頂、月に羽衣のかゝつたやうな竹生島を遙かに望む。

然し、それが、倒に水底の影を見るのか、月の下に、島が浮いて居るのか分りません。

場所は、一昨夜、確に通つて來た場處ぢやありましたが、私の姿も、船もない。

遠く向うに、明い夜を、竹の葉の落つる風に、一枚、小船が漕いで居ます。別に苦しくもなし、痔くもないが、あまりのたよりなさに、其の船のある處まで行つて見ようとしたのですが、何のくらゐ遠いか分らぬ。雑と自分の考へぢや、三千里はあると思つた。

物語に聞いて居る、水晶の渡殿はないか、瑪瑙の橋はないか、物干棹の階子もあらば、それを便りにと、うつゝ心に、まあ、先づ鰭を動かしたんです。

此の目で。」

といつて、眼鏡をそツとはづして、其を、手巾以て拭ひながら、

「目を三千里の水面へ、半分出して、鯉や、諸子（（魚條））や、自分の友だちの姿は見ないで、偏に其の船の方へ。

月夜は其まゝ。

明けもせず、日も暮れぬが、幾日經つたか、何月か、年もどのくらゐ越したか知らん。凡そ此の湖にあらゆる魚の鱗の數を合はせたほど、小うねりに畝る波の數を、次第々々に一ツづゝ泳ぎ抜いて、月に、

や、薄雲のかゝつたとき、船のはとりへ着いたんです。

唯、湖上へ、障子をはめたやうに、白くなつて、船の中に居る人が、影のやうに見えました。

二人居て、さしむかひに二人坐つて、二人とも婦人です。

舳を背にしたのは年紀が些と上で、舳に向いたのは少し年が若かつた。繪で見る、村雨、松風かと思、ふと然うでない、饂飩屋の母娘かと見たが、無論違ふ。

少いのは水紅色の褄を深く、年紀上のは、淺黄の襟で、腰蓑をかけて居た。いづれも端麗たとふるにものはない。

夢か、清しい瞳が動けば、幻か、美しい影が流れる。其の黒髪も、あの雪を欺くといふ、顔も頸も見えましたが、船が開く、波が隔る。

と雲が晴れて、月が明うなるに従うて、船も人も、却つて澄み渡つて薄くなりますから。

慌てゝ、追ひ縋ると、叉薄雲がかゝるんです。

船も人も明く見える、其の俤は、と寄らうとする。

船が開く、波が隔る。
と雲が晴れると、月が明くなる、船も人も消えさうです。
あゝ、其の口許を、と水から魚の頭が離れる。
船が開く、波が隔る。
波は颯と、其都度、濃い緑になるのですよ。
おなじことを何度か、不思議に岩角に頭も碎けず、水草に咽喉も縊られないで、最後に、船と月との中に、一むらの白い雲が、やゝしばらく漂うて、十筋ばかり、絹絲をかけたやうに、颯と雨が來た時でした。
少いのが、小笠を取つて、腕を白く衝とかざした下へ、鬢の毛がはら／＼と、年紀上なのが、つむりを入れて、密と其の掌をあげたと思ふと、霞を解いた小さな網が、しぶきのやうに水の面へ音もなく廣がつた。
私は飛上つて船の中へ。
少い方が、庇つて呉れると見えました、ト斜めに取つて、下へ開いた袖の上を、翻然と越えて、年紀上の方の、手の裏へ入つたんです。
乳房に縋つた膚ざはり、自分の母親の懐に抱かれ

たと思ふと、骨も身も溶けたです。
靴音がして、（鮒の鮨下さらんか、）といふのが聞えた。
自分の聲です。
吃驚して目を開けると、私は俎の上に乘つて、屠犬兒のやうな、賤しげな、肥つた男が、前はだけにしやがんで、庖丁を取つて、逆手でせう。
野面で、戸外から、店頭の土間を覗き込んで、
「直ぐに喰べるのぢや、可加滅にぶつ／＼やつてくれい。」
といひます。
おのれ惡魔、學院の姫を呪つて、炎を吐いて、黒い影のある處を片ツ端から焚いた奴の。
洒亞々々／＼と琵琶湖を渡つて、鮎の煮浸で三椀の飯を喰ひ、一錢が煙草を買ひ、義士傳と一緒にして、衣兜の口を開けた、づり下つた、其の態は何だ。
面はよ、目はよ、帽子はよ、服はよ、口はよ。
（馬鹿、）
今日は母様の精進日だに、
（馬鹿野郎、）
と喚きつけようとすると、聲が出ない。　唇は

閉ぢつけられて、舌にしつくいを塗られたやう、骨はしびれる、筋はなえる、いや、其心地といふものは、」

と、思はず口を拭つたが、今は早やしゝびしほの苦みを忘れ得て、唇に香の殘る、苺の露を拂つたのである。

思ふに、……其時湖水を通つた人があつたら、船も霞も見えないで、唯、水を放れて、溌剌として魚の躍るのを見たであらう。

「自分は鮒に化けたと見える。

酒の粕に浸されて、大盤石で壓しつけられる、其の苦みを呻吟つたんです。

さては夢と心着くほど、咽喉が乾いて堪へられないので、前後不覺、毒蛇のやうな形をして、

孃さん。鮒の癖にあなたの苺を奪つた、盗んだも同じです。

是なんですから……

引掴んでも、引摺つても、姫のかくれ家へお連れ下さい。しかし餘りの當推量、よし、間違つても構はんです、命終つて仔細はないので、一目見て、お詫を、」

と心を籠めて、熟と瞻めた。
美女の目も露を含んだ。しばらくものもいはなかつたが、衣紋を繕ひ、容を更め、
「とも／＼お察し申し上げます、實は、私は、あの、其の時の使と同一ものでござんすよ。」
「……」
「更めて姫様から、貴下へお口上がございます。仇同士も御縁の端、定まつた約束があるのでござんす。
決してお怨みは申しません。
懐しいお客様がおいで遊ばしたが、山家のこと、片田舎、せめて、これを、とおつしやつて、私と二人で摘みました。
苺は貴下へ。
私は、おつかひに參りましたが、思召しが以前のやうでございますと、召食らうとなさいましても、これが火になつて燃えますから、それでは却つて、お渇き遊ばしたお口を燒いて、猶お苦みを増すばかり。心しておあげ申せ、と姫様がおつしやりつけ。すぐにはお言に從ひませんで、失禮でござんしたが、私の手から召あがつて、冷い甘い露の味とお喜び下

さいまして、お嬉しう存じます。
而してお目にかゝりたさは、姫様もおなじお心、それでも貴下が五十年、百年の後でござんせんと、時節が來ませんから不可ません。それをおむづかりなさいますから、姫様もあなた、時々〳〵、あの……長いのと、肥つたのが、玄吉さんに鍋墨を塗られた時の、其の顔色のをかしさを、お思ひ出しなさいます時でなうては、莞爾と笑顔を見せなさいます事はないのでござんす。
貴下もおあきらめなさいまし。
……そんなに思召して下さいますなら、更めて姫様からお願がございます、お肯きなすつて下さいまし。
お住居の此の山は、清淨〳〵な處ですが、下には惡いものばかり、月の下へ黒雲のかゝりますと同じ事、學院の極樂に、長いのと肥つたのと、惡魔が住んだと違ひません。此處は天上、町は魔界。
あはれな美しい御存じの、あの饂飩屋の母娘の人も、魔に魅入られて危うございます。商人の形に變じた、鬼のために、今夜にも汚されようといふ處、其の外の人たちも、皆それ／＼に悩みがございますの

を、自然とお分りなさいませう。
百人千人お教へなさいますのも、一人を二人を、お助け遊ばすのも、貴下の勤は同じ勤。學校のたちますまで、此處で庵をお結び遊ばし、たとひお姿は見なさいませんでも、姫様と御近所で、松の風、浪のしらべ、同じおもひを通はせたり、燕にことづけて、心ゆかしになさいましな。貴下。」
と教へる。
辰起は眼を塞いで、福音を聞くのであつた。
「これから山をお下りになると、下の宿は大騒動。
あの、寺は、怪しい恐しいことがあつて、長く無住になつて居ります。其の草の生えた本堂の、板敷の眞中、合せ目と思ふ處に、蛇の大きなのが、三條、鎌首を立てゝ、睨みますので、葬禮が一組、僧俗も立竦みになつて居りますから、貴下がおいでなさいまして、貴下がお世話なさいまし。
懐にお持ち遊ばす、其の玄吉さんの戒名を、掌へ取つて、お示しになりますと、煙のやうに消えませう。
宿の人は、坊を清めて、貴下にお机、お褥を差上

げます、　ーー　しばらく其處に杖をお住め遊ばせ、と姫様がおつしやいます。……

私だけは御用の時、お傍まで參りませう。さあ、時刻になりました、又、お目にかゝりますまでも、おなごり惜うぞんじます、貴下、もし貴下。」

といふ聲、裳のはこびはら／＼と、妙なる人の氣勢して、上衣を取つてかけたのを、法の衣を着る心地。

ぞツとばかりに身に感じた。　義士傳に手を支へ、明星を瞳に宿して、坐ながら半身伸上れば、燕が飛んで人もなく、唯松の風、浪の色、天人石に聲なうして、琵琶湖の水に調在焉。

あはれ恁るものをこそ、散らした酒肴恐しく、辰起は堂と坐した。

「呀！」

唯見れば、傍に翁あり、白髪薄く頭禿げて、面長く棗に似たり。蠶のやうな眉白く、眠れる如き其眼ざし。袖なしをつけて、丈高く、長き杖を支いたるが、酒の瓶と、竹の皮を、靜に左右の袂に納むるなり。

「貴下は！」

といふに、敢て其の目を開かむともせず、従容として、影の如くに立つて、優しい口を堅く結んだ、下唇やゝ解けて、

「浄めの手つだひをして進ぜる。」

「御老人！」

「私は其方の母親の父の弟ぢや。

大叔父ぢや、琵琶湖を船で渡つたあたりは、大事ぢやつたで、親類一門、其方の影身に附添うたわ、よいか。」

佛弟子、勉旃々々。

「今は此の山の神ぢや。」

【完】

☆
2
5